

『口頭詩集ひなどり』の言葉と表現性 — 昭和中期の長野県の児童の方言・言語的特徴を中心に —

Language and Rhetoric of “Hinadori: A Collection of Children’s Oral Poetry”
— Focusing on the Characteristics of Children’s Dialect/Language in Nagano Prefecture
around the mid-Showa Era —

吉田 雅昭*

Masaaki Yoshida

This study has aimed to examine a book of poems entitled “Hinadori: A Collection of Children’s Oral Poetry,” published by Nagano Childhood Education Association in 1971. As the book chronicles the language of one- to six-year-old children according to age, it serves as a substantial record of early childhood language. It also verifies the use of Nagano dialect forms such as “~zura,” “~dani,” and “~ja.” In addition, the collection is recognized as linguistic data that help promote an understanding of the reality of everyday life of children at the time.

1. はじめに — 『口頭詩集ひなどり』について —

本論は、『口頭詩集ひなどり』というタイトルの詩集に関する考察を行うものである。なお、本論において『口頭詩集ひなどり』は本書と表記する。まず、本節では、本書がどのような特徴を有する詩集なのかについて、これまでの研究を含めた説明を述べることにする。

本書は、1971年に「長野県幼年教育の会」が編者となり『鳩の森書房』から発行された詩集である。詩集といっても、その内実は1歳児から6歳児の言葉を記録し、年齢ごとにまとめ内容により区別し編集されたものであり、実態としては幼児の言葉の記録集という側面も大きい。本書は、2014年に日本図書センターから刊行された『戦後幼児教育・保育実践記録集第1期 表現する子ども』というシリーズの5巻に収録された。本論では、この『実践記録集』を底本とする。

そして、本書に関しては、吉田・守・鈴木（2015）において部分的な考察を行っている。当該論文は『実践記録集』に掲載された書物3点を通して戦後の実践記録の位置づけを考察したが、その中では本書について1～3歳児までの言葉を対象に考察していて、本書の全体像を考察したものではなく、幼児に関する言葉遣いの特徴を述べたという段階に留まっている。

本書では、1～3歳児の分量が62ページに対し、4～6歳児の分量が167ページというように4歳児以上の記録が7割を占めていて、全体としては4歳児以上の子どもの言葉の記録が中心を成している。本論では、本書の中心的部分を占める4歳児以上の例を、対象範囲とする。

本書の4歳児以上の分類は以下の通りである。

- ・ 4歳児：(1)するどい感覚 (2)するどい観察 (3)たのしい想像 (4)友だちのなか
(5)生活をもとめる
- ・ 5歳児：(1)美しい感覚 (2)するどい観察 (3)豊かな思考 (4)豊かな想像
(5)友だちのなかでのびる (6)生活をもつめる
- ・ 6歳児：(1)美しい感覚 (2)するどい観察 (3)豊かな思考 (4)豊かな想像
(5)友だちのなかでのびる (6)真実をもつめる

* こども教育学科 講師

4歳児の分類を発展させる形で5歳児以上の分類が行われている。5・6歳児は基本的に同じ分類であり、徐々に抽象的な内容が加わっている。参考に、3歳児以下の分類も述べておく。

- ・ 1歳児：はじめてのお話
- ・ 2歳児：(1)お話をする子ども (2)発見、おどろき
- ・ 3歳児：(1)お話をする子ども (2)躍動するお話

このように3歳児以下では1～2分類であり、3歳児以下と4歳児以上の間で分類が大きく異なることが分かる。そこから3歳と4歳で大きな区別が生じているといえる。

また、長い例では2ページにわたるが、多くは1ページあたり、1～2例が収録されている。

表1：＜『口頭詩集ひなどり』の文例数＞

1歳児→16例	2歳児→34例	3歳児→31例	4歳児→53例	5歳児→77例	6歳児→54例
---------	---------	---------	---------	---------	---------

4歳児以上になると各年齢で50例以上あるが、本論では年齢で分け、上記の分類に合わせて各1例ずつ述べることにする。それぞれの例が有する言葉遣いや表現方法の特徴を、文の内容と共に考察し、本書の例文の実態を明らかにしていく。

本書には基本的に作者（言葉を発した子ども）の氏名が記載されているが、本論では氏名については標記せず、男女の特徴などについては著者の判断で男女の区別をし、言及を行っている。また、一文節（厳密ではないが）ごとに1マス開けて表示しているので、それを踏襲して記載する。ただし読みやすさを考えて、適宜、1マス以上空けて改行することがある。いずれの年齢でも長い文、短い文が入り混じっていて、年齢が上がるにつれて文が長くなるというわけではない。以下では、年齢ごとに節を分け、4歳児の例から順番に述べていくことにする。

2. 4歳児の例

- (1) かあちゃんの においわねえ きょうこちゃんの うちの こうばへ いっとるもんで
こうばの しごとの においが するよ まえ ゆきえを つれていって くれたよ
かあちゃんが かえってくると こうばの においがするの (p.74)

この例は「上伊那郡宮田村」の保育所で採集し、1969年版（の「ひなどり」、以下略）に収録された。「するどい感覚」の例に分類されている。この例では、動作の進行・状態を表す「～している」の部分に「とる」が使われ、西日本的な方言の特徴が表れている。また、母親のことを「かあちゃん」と言うなど、当時の言葉遣いを反映している。

「かあちゃん」から「こうばのにおいがする」ことを保育所の先生に伝えているのだが、(1)の発話者は、においを手掛かりに、母親が働いている様子を、実際には見ていなくても感覚的に理解していることが伺える。五感を通し、大人がどのような仕事に従事しているのか、子どもにとって分かりやすい状況が存在していたことも表現されている発話である。

- (2) せみ なくと うるさいなあ だけど なくても めから なみだが ちっとも
でんじゃんか ぼくたち なくと からい なみだが ポロポロ でてくる (p.79)

この例は飯田市で採集し、1969年版に収録された。「するどい観察」に分類されている。これは母親が採集した例だが「自分のつかまえたせみを手にしながら不思議そうな顔をしていた」というコメントが載せられている。蝉はずっと鳴いているが涙は出ない。一方、自分が泣くと涙が出てしまう。その差が理解できていない様子が言葉に表れている。断定表現で「じゃんか」が現

れるが、馬瀬編（2010:268）によると「じゃんか ではないか。」と書かれており、また、長野県の多くの方言集にもその用例があると述べてあり、長野県で広く使用されていることが分かる。

「じゃんか」は東京方言にも「～じゃん（か）」としてよく使用されるが、意味としては長野県方言の例と同じで、甲信から関東地域で一般的な文末表現である。

人間の感情表現としての「泣く」と昆虫が生理的現象として「鳴く」のとは内実が異なるが涙の有無を観察により確かめていて、自然への興味の萌芽が感じられる例だといえる。

- (3) おそらでいちばんえらいの だれだとおもう？（おてんとうさま）おてんとうさまはえらいから おとうさん おかあさんは やさしいから おほしさま だって いつも こどものおほしさまと いっしょにいるんだもん（p.92）

「小県郡」の保育園で採集し、1966年版に収録され「たのしい想像」に分類されている。

空で偉いのを「おてんとうさま（太陽）」と言っているが、ここで言う偉いは、力強さのニュアンスを帯びているだろうか。単純な優劣の意味とは異なるように思われる。発話の中では太陽を父、星（おほしさま）を母と見立てている。太陽は独立して存在する一方、星は小さな星（こどものおほしさま）と共に存在する。それを自分の家族に投影し、発話者と家族との距離感が、天体の解釈に反映されているようである。ここでの「偉い」には孤独の意味もあると考えられる。

- (4) よしろう：あっ あめふってきた
あつお：あの ゆきだるま とけちゃうよ
よしろう：うん そうだな あめと ゆきと けんかすると あめのほうが つよいだよ（p.101）

「茅野市」の保育園で採集し、1969年版に収録され「友だちのなか」に分類されている。

(3)と同様、この例文も自然現象について話しているものだが、その解釈は子どもの独特な観点が示されている。雨が降ると雪は溶けてしまう。そのことは子どもたちも理解しているが、理由を喧嘩に求め、雪より雨が強いから雪は負けて消える（溶ける）との解釈で、これも自分たちの世界に自然現象を当てはめて解釈しているわけだが、子どもの中では矛盾なく理解しやすい現象と言えるのではないだろうか。最後の「つよいだよ」は共通語の会話では「つよいん（の）だよ」となるが、この例文では「のだ」の「の」が脱落している。こうした「～だ」という表現は長野県方言では一般的な現象であり、馬瀬編（2010:316）には「だ ①のだ。のです。断定を示す語。」と述べられている。自分の思いを断定的に伝える際「～だよ」は使用しやすい表現といえる。

- (5) おらさ これだけ(指十本)になったら ダンプカーの うんてんしゅに なるん それに ミキサーしゃや ブルに のって はたらくん あかちゃん うまれたら おんぶして ダンプに のせてやったり するんさ（ふーん） だってさ おらちの かあちゃさ はたらきばかんだったんだど ぼくと あんちゃば おいて はたらき いぐんだど そいでさ ぼく ないたごとも あるん でも かあちゃ いるときは ながねんさ——（だれ せったん（言ったの）働きバカって？） おれさ—— じぶんで かんがえたんさ（pp.114-115）

「飯山市」の保育園で採集し、1970年版に収録され「生活をみつめる」に分類されている。

自分のことを「おら」と自称している、男性の一人称代名詞として、長野県方言では広く分布

している。また、文末詞（終助詞）で、「ん（共通語で‘の’に相当する）」が多用されていることもわかる。なお、「はたらきばか」という表現を、聞き手(当時の保母)は「働きバカ」と解釈しているが、「働いてばかり→働きばか（‘ばか’は‘ばかり（ばっか）’の省略形、異形態）」という解釈も考えられるのかもしれないし、そのようなニュアンスも感じられる。いずれにしろ「労働」が、発話者の子どもにとって身近で想像しやすい状況にあることを示した発話だといえよう。

3. 5歳児の例

- (6) いいてんきに なって よかったね あれー はるの においが するよ なつかしい
におい (p.120)

「茅野市」の保育園で採集し、1969年版に収録され「美しい感覚」に分類されている。(1)の例と同様、匂いがキーワードとなっていて、子どもの匂いの重要性が感じられる。ここで「なつかしい」という言葉が登場するが、この子にとって春の匂いは昨年やそれ以前に感じ取って再び同じ匂いを嗅ぎ取り、古い記憶を表す「懐かしい」という語彙を発したと考えられる。子どもの中では、1年前の記憶は懐かしい思い出といえるのだろうか。1年を長い時間と捉える子どもの時間感覚を表現すると、この文脈でも「懐かしい」がピッタリと当てはまるのであろう。

- (7) この かに どっちが おんなかね こっちは あしが はちほんだよ こっちは
ろっぽんだよ 妹(あっ、ここにあしがとれて、いっぽんあるよ。) あしの はちほんの
ほうが おんなかね はさみが おおきい ほうだよ あかちゃん うんだとき
まもってやるんだと おもうよ このかに おとこだったら けっこん しちゃうよ
(p.132)

「駒ヶ根市」で父親が採集し1969年版に収録され、「するどい観察」の例に分類されている。食用のカニを歩かせてみたら、妹と楽しみながらよく観察していた、という旨の記載がある。疑問を表す際、文末に「～かね」を用いることが当該地域で一般的だったことが伺える。また動物に対し、「オス・メス」という性別を表す言葉は用いず、人間と同様に「男・女」を用いて区別している。実際のカニはオスの方が大きいようだが、この発話者は赤ちゃんを守るのが「おんな（メス）」の役割と考え、守るために大きい方が良いと考えている。自分の世界観で動物を捉えていることが、言葉に表されている発話だと考えられるのである。

- (8) おばあちゃんは どうして かおに いっぱい せんがあるずら みゆきちゃんは
ちっともないのに (せんじゃあなくて、しわっちゅうもん、おばあちゃんはとしよりだから、
しわがいっぱいできてるのえ) そいじゃ みゆきちゃんは としよりに ならないと
しわがいっぱい できるとこまるから (p.146)

「茅野市」で母親が採集し1969年版に収録され、「豊かな思考」の例に分類されている。この例は家庭内の子どもと祖母の会話だと考えられるが、祖母の顔を観察し、しわがあることを自分と比べつつ疑問に感じ、年寄りだからとの理由を聞き、年寄りになることを拒否するような受け答えを行っている。「ずら」は推量を表す文末形式だが、馬瀬編(2010:294)には「ずら①だろう。でしょう。推量の表現。」と述べられ、また、多くの方言集にも「ずら」の用例があることが指摘されていて、長野県方言の代表的な文末表現だと考えることができる。

なお一人称表現として自分の名前に「ちゃん」を付けていて、現代の女性が用いる表現方法を

垣間見ることができる。保育園などで「みゆきちゃん」と言われているのをそのまま自分で用いているのかもしれないが、子どもの一人称表現に様々なパターンがあることがうかがえる。

- (9) ひさし：このたいふうで ほしいえん とばされちゃあ いいなあ
ようこ：どうして
ひさし：だって おそらの うえで おひる たべられるもん
のおお：かえるとき どうするの
ゆみ：らっかさんで おりてくれば いいじゃ
しゅんいち：かさで ふわっと おりてくれば いいじゃ
ひさし：おおい くも こいって よんで くもの うえで おやつ たべるもん
おひるねも できるよ (p.148)

「岡谷市」の保育所で採集し1968年版に収録され、「豊かな想像」の例に分類されている。

ここで出現する「～じゃ」という文末形式は、馬瀬編(2010:262)には「じゃ だ。です。」という解説と、「じゃー ①では。であれば。②ではないか。」という解説が掲載されている。

(9)の例文では、上記解説の中の「ではないか」に相当すると思われ、「落下傘で降りて来れば良いではないか」といった意味で、自分の思いをそのまま友だちに伝えている文である。

ひさしは、保育園が飛ばされたら空の上で何かを食べたり昼寝をしたりできると想像(空想)して話している。それに対し、友だちは質問を発したりそれに対する回答をしたりする中で、自分の発想を伝え合うようにして、全体の会話が成立している。「豊かな想像」ではあるが、空想の世界に生き、その世界を楽しんでいる子どもの姿を表現する発話だといえる。

- (10) たあちゃんは ポスだに だって いつも めいれい するんだもん 「みずを
もってこい」って でも ぼくは もって いかないんだ だって じぶんのことは
じぶんで するんだ (p.160)

「上伊那郡長谷村」で母が採集し1967年版に収録され、「友だちの、なかでのびる」の例に分類されるが、現在は伊那市(南信地方)となっている。この例の「～だに」は、その後で接続詞的な「だって」に続くことから、文末形式として使用されていると思われる。「だに」に関し馬瀬編(2010:325)には「①だね。だよ。ですのに。ですよ。」という説明がある。

たあちゃんは、いつも命令をするから、ボスなのだ、と母に伝えている。しかし、発話者は、自分のことは自分です、という思い(信念に近い)があるため、ボスの命令を聞かないことも、同時に伝えている。自分自身の意志の強さを母にアピールする発話といえよう。

- (11) ぼくがねえー やすみに うみへ いっただよ おとうちゃんが ひとつしか
やすみないって いうもんで おかあちゃんと おとうちゃんと くるまで うみに
いったら ごみだらけで くさいだよ そんだもんで やまへ いくかって いったら
こうつうどめで いけなんだ かえろうと おもったら こうそくどうろに
じどうしゃが いっぱいいて ちょっといっちゃ とまるだよ うーんと うーんと
ながくけ かえってきたの よるだったよ (p.177)

「南安曇郡穂高町(現在の安曇野市)」の保育園で採集され1970年版に収録された、「生活をみつめる」に分類される例文である。この例では休みに家族で車で旅行をし、そのために高速道路を使用しているという、まさに現在の家族旅行と同じ情景が映し出されている。そして渋滞に巻

き込まれて夜に帰ってきたという、今のニュースでもよく報道される状況が見られ、この当時の子どもの生活と現代のライフスタイルとの共通点を見出すことができると思われる。

安曇野市は中信地方に当たるが、「～だよ」という(4)の例にも出現した表現が見られ、この表現が長野県方言として様々な地域で用いられていることがわかる。また、過去の否定表現「～なんだ」が現れる。馬瀬編(2010:401)には「なんだ なかった。」との見出しがある。「～なんだ」は西日本方言で主に使用される表現だが、(1)の「～しとる」と同様、長野県方言の中にも西日本方言的な表現があることが、こうした例からも確認できるといえよう。

4. 6歳児の例

- (12) おとうちゃんの こしがすき ここんところがだいすき だって よしこ
おとうちゃんの バイクにのるとき おとうちゃんの こしに しっかり
つかまるんだもの (p.182)

「上水内郡柏原保育園(現在の信濃町)」で採集され1965年版に収録された、「美しい感覚」に分類される例文である。この例の解説には「父の日に、おとうさんのだいすきなところをはなし あったら、よし子ちゃんだけ大変めずらしい所が好きだと実感をこめて話していた。」と述べられていて、保育者にとって印象に残る発話だったと考えられる。6歳児が父親の腰につかまりながらバイクに乗るという状況は現在では想像し難い所があるが(どれ位の範囲でどのようなバイクに乗っていたのかは不明である)、この子にとっては父親と一緒にバイクに乗ることは楽しみだったといえるだろう。「おとうちゃん」との関係性を上手く表現した例でもある。

- (13) あっ いた! あの ほしだ まろし いつも べんじょのところから みている ほし
あの ほしっきり まろしのほう むいているから すぐわかる ほかの ほしは
あっち むいたり よこむいたりしていて あの ほし いちばん よくひかっている
(p.186)

「長野市」で採集され1970年版に収録された、「するどい観察」に分類される例文である。

この、天体を観測して星が自分のほうを向いているという感覚を言葉にした例は、本書でも他にあり、吉田・守・鈴木(2015:113)に、3歳児の例文に「月が自分について来る」ことを述べた例文が紹介されている。月や星などが自分のほうを向いたり自分について来たりする感覚は子どもにはよく見られ、(13)もそれを述べた典型例と言えるだろう。ただ、たくさんある星から一つを選んでいくことになるが、「いつも便所から見ている星」であり、いつも自分が注目しているからこそ、自分の方を向いているという思いが成り立っている。自分を中心に天体を捉えている感覚が言葉として表現された例とも言えるだろう。

- (14) カレーにどうして あわがたつの?…… あっ そうか したから ねつがきて おして
あわがでるんだ それじゃ シャぼんだまは どうしてふくらむの? あっ そうか
ストローでフーっとふくと シャぼんだまに くうきが はいって ぼわんと
ふくらんで もっと ふくらますと ぼわーんと こわれるの (p.194)

「上伊那郡中川村」で母が採集し1970年版に収録され、「豊かな思考」に分類された例である。

この発話は、家で母がカレーを作っている際に、発話者がその様子を見ながら発した言葉である。カレーを沸騰させる際に出る泡の原因が、下からの過熱だと理解する。それから、泡によりシャボン玉を連想し、膨らむ原因を考え出して、自分なりに答えを出している。自分なりに現象

の因果関係を考え、答えを導き出してそれを言葉として発しているわけで、科学的思考の芽生えを感じさせる例と言うことができる。また、熱や空気などの概念の理解が進んでいるからこうした発話ができるのであり、自分の知識を論理的思考により整理し言葉として表現する過程をそれほど長くない文の中に読み取ることができるのではないだろうか。

- (15) おほしさま どうしてひかるか しってるか ボクしってるよ ^(いって) せってみるか
うちゅうじんが キカイをつかってさ でんきつけるんだよ スイッチおすんだよ
あさになるとさ スイッチきって けすんだよ そうすると みんなきえるんだよ ね
せんせい そうでしょう (p.202)

「上水内郡信濃町 柏原保育園」で採集され1965年版に収録された「友だちのなかでのびる」に分類された例である。この時代になると、小さい子どもの頃から電気に囲まれた生活が当然という世代であり、例文からもそうした背景が感じられる。

- (16) ぼく ころんじゃった でも なかなかったんだよ ちが でてきて すごく
いたかったの がっこうの おにいちゃんが きたので ひとつぶ だけの なみだが
でただけだよ うんと いたかったけど がまん したよ ひとつぶの なみだで
がまんした (p.212)

「南佐久郡」の保育園で採集し1970年版に収録され、「友だちのなかでのびる」に分類されている。この例の「学校のお兄ちゃん」は、小学生を意味していると考えられる。「我慢したこと」を保育士に伝える発話なのだが、「一粒の涙が出ただけ」であることが、我慢の証拠となっている。自分が我慢できたことを、客観的証拠を伴いつつアピールする文である。小学校入学を控え、子どもなりに大人としての自覚が生み出されつつあることを示す発話だと考えられる。

- (17) せんせい いつも おなじふくだね おかねないずら びんぼうだね せんせいさあー
あのさあー かいしゃにいくと おかねくれるえ でもさあ くれるかどうかわからない
(p.219)

「諏訪市」の保育園で採集し1965年版に収録され「真実をみつめる」に分類されている。

「おかねないずら」との例があるが、(8)同様、ここでも文末形式の「ずら」が用いられている、当時の子どもにとってもこの表現が身近でなじみのある形式であることが感じられる。

この発話から、6歳になると「お金」が生活にとって重要であると理解していることがわかる。また「会社」がそのお金を払う（子どもにとってはくれる）場とも認識している。ただし、最後に「くれるかどうかわからない」と発話していて、会社が具体的にどういう場所なのかは、それほど分かっていない状態であることもうかがえる。いずれにせよ、大人の世界を子どもなりに理解し始めていることを示す発話例だといえるだろう¹⁾。

5. まとめ

本書の文には2、3語のものもあるし、非常に長い文も存在するが、家庭や保育園などの日常生活の場を通し、周りの友達、自然、大人の仕事などを、想像力を働かせ、自分なりに捉えている子どもの姿が映し出されていることが、本論で取り上げた例文からうかがえるといえる。

文末形式には長野県方言で用いられる形式が、本書でも現れていて、その意味では方言が用いられているといえる。ただ、語彙に関しては共通語的なものが多く、方言の使用が衰退し、文末

に追いやられていく昭和中期の実態が本書の例からも示されていると考えられる。

本書には、(6)の「なつかしいにおい」と述べて自分の過去を思い出す例や、(12)の「おとうちゃんのかしがすき」と述べて日頃の自分の気持ちを伝えている例が見られるが、こうした例からは、子どもが今現在だけでなく、過去へと遡りながら自分自身の事柄を言語化することが可能であることが理解される。これらは、岡本（2005）の次の記述に当てはまるだろう。

さらに四歳頃からは、自分が「過去」をもつこと、言いかえると「想起可能な自己」を知りはじめます。大げさに言えば「歴史的自己」の出発とも考えられるでしょう。`historical self` 「ストーリーを担った自己」になるとも言えます。（p.197）

ところで、なぜ口頭詩が長野県で編纂されたのかについて、吉田・守・鈴木（2015）では言及されていなかった。その仔細は、長野県作文の会会員である久保田千足氏が、児童詩の範疇として戦前からの伝統の中で考察しており、関係箇所を引用する（以下、久保田2009から引用）。

64年に機関誌「作文しなの」を創刊した。（中略）文字通り、県事務局とサークル・会員を結ぶ動脈の役割を果たしつつあり、60年代の児童詩教育運動興隆の基盤を成していた。直面する諸問題を乗り切るために、村山俊太郎の児童詩論や無着論文「生活つづり方と教科教育」での「内」「外」論についての討論を特集する等理論的な力量の向上もねらいとしていた。65年、会員の酒井十四男らの援助もあって、幼年教育の会では幼児のおしゃべりやつぶやきを採集した口頭詩集「ひなどり」を創刊した。この実践は、たいへん貴重な実践として全国的にも注目された。（p.236）

上記論文は長野県の児童詩教育に関する論文で、基本的には小学校を中心とした義務教育段階における作文教育の取り組みの歴史を述べているが、その文脈において本書が編纂されたことが述べられている。戦前に生まれ戦後に再度復興した生活綴方教育の中から口頭詩集が生まれたわけで、大きく言えば国語教育の実践活動の一つとも捉えられるのである。もちろん教師が先導するような方法ではなく子どもの自発的な言葉を集め、その年代ならではの表現の実態を、実例を元に考察するために編纂されたのではあるが、単なる言葉の収集ではなく、生活実態の追求や生活の質の向上といった目的を有した運動の、派生形の一つと考えられるのである。

長野県の教育運動の基盤があるからこそ口頭詩運動が行われたわけで、ただ子どもの言葉を採集した成果ではないことを、宍戸(1974)は次のように述べて強調している。

長野の実践は、生活に根ざし生活を変える幼児教育の実践を口頭詩運動としてとらえたのです。長野のこの実践に学ぶとすれば、各地域の保育者たちが、その地域の条件に即して、何を突破口とすれば生活を変える保育実践が可能になるかを父母とともに探求すべきだと思うのです。（p.44）

保育という枠を外れ、方言の実態や使用語彙など、小学生以上も含め、言葉から子どもの生活実態を理解するためにも、本書のような成果は貴重な価値を有すると考えられるのである。

注

- 1) 「お金」に関する例としては、5歳児の発話として、次の例文が存在する。

せんせいって おかねもちだなあー これぜんぶ せんせいの？（パンやさんにやるおかねよ）
え！！ ぜんぶ？ ひゃー パンやさんって よくばりだなあー（p.140）

この例では、パン屋へ支払うためのお金を見て、日常見ることのない量に驚愕する子どもの様子がうかがえる。5歳位になると、お金の重要さを日常生活の中で、すでに実感しているのだろう。また、この時点では金額のような数値的（デジタル的）価値よりも現実存在する即物的価値としてのお金の理解であり、貨幣の価値の理解については不明瞭な段階ではないだろうか。

文献

岡本夏木（2005）『幼児期—子どもは世界をどうつかむか—』岩波新書

久保田千足（2009）「長野県児童詩教育の歩み」『民主教育研究所年報』10、民主教育研究所,pp.218-262

穴戸建夫（1974）「口頭詩「ひなどり」の運動に寄せて」『口頭詩研究ノート』長野県幼年教育の会(本書と同様に『戦後幼児教育・保育実践記録集第Ⅰ期』を底本として使用した)

馬瀬良雄編（2010）『特別版 長野県方言辞典』信濃毎日新聞社

吉田雅昭・守渉・鈴木純子（2015）「幼児教育における戦後の実践記録の位置づけについて」『研究紀要青葉』7-2,pp.107-123

付記：本論は、日本保育学会第72回大会（2019年5月5日於大妻女子大学）での口頭発表の内容を基にしております。